The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東アジア青銅器文化の研究 ： 弥生・古墳時代の青銅器を手がかりにして
Author(s)	近藤, 喬一
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42913
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 13 】

氏　　名	近藤喬一（こんどう たかいち）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　15062　号
学位授与年月日	平成12年2月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**東アジア青銅器文化の研究** **―弥生・古墳時代の青銅器を手がかりにして―**
論文審査委員	（主査） 助教授　福永　伸哉 （副査） 教　授　肥塚　隆　　教　授　村田　修三

論文内容の要旨

本論文は、弥生時代の銅鐸、青銅武器、古墳時代の銅鏡などに関する詳細な分析から、日本列島の青銅器文化の展開過程とその歴史的意義を明らかにするとともに、中国、朝鮮の青銅器文化との比較検討を通じて、東アジア青銅器文化の特質に論及したものである。論文は5部16章からなる本論に序論と後論を加えた構成で、A4判483頁(400字詰原稿用紙換算約1300枚)、図版161枚の大作である。

全体の構成と研究戦略を概述した序論に続いて、第1部では商代中原の青銅彝器、東北地区の曲刃有柄（有茎）式銅剣、西晋の紀年鏡などをとりあげて、中国青銅器文化の実態と特質を検討する。初期王権の支配関係を観念的に表すものとして青銅器が用いられた商代中原に対して、東北地区における曲刃有柄（有茎）式銅剣の登場はむしろ中原と周辺民族との文化交流という側面がうかがわれることを指摘する。列島にも流入している曲刃有柄（有茎）式銅剣や西晋の紀年鏡については型式や年代に関する緻密な議論を展開し、列島の青銅器文化を東アジア的視点でとらえるための基礎を固めている。

第2部では、列島青銅器文化の直接的な故地となる朝鮮の青銅器文化の展開について、青銅器の組み合わせを重視しながら7期に編年してその年代を検討するとともに、遼寧青銅器文化との関係を整理しながら、朝鮮における青銅器文化成立の経緯を論じた。

第3部では弥生時代の青銅器文化の実態を、農耕儀礼との関わり、埋納のあり方、銅矛から見た文化系譜、銅鐸と平形銅剣の関係といった多様な観点から検討している。弥生中期前半以前の中国東北地区および朝鮮の文化複合と関連する青銅器文化から、中期後半以後には中原王朝の文化複合に連なる青銅器文化へと転じたことを指摘し、他のさまざまな考古資料からうかがわれるこの時代の列島の歴史展開を整合的に説明した。

第4部では、古墳時代の青銅器文化について論じた。とくに日本考古学上の大きな研究テーマである三角縁神獣鏡に焦点をあてて独創的な考察を展開している。鏡の系譜論、型式論、編年論、製作技術論といった純粋に考古学的な検討だけでなく、中国文献を丹念に読み込むことによって、三角縁神獣鏡が強い政治性を帯びた青銅器として列島の国家形成過程の中で大きな役割を果たしたことを実証的に説く。

最終の第5部では、中国、朝鮮、日本の青銅器を採鉱、冶金、鋳造技術、原材料などの技術的側面から検討し、東アジアの青銅器製作技術の共通性や地域的差異を指摘するとともに、工人集団のあり方についても考察を加えた。

以上の検討をもとに、後論では東アジア青銅器文化の特質に論及し、中国中原では初期王権と深く関わって青銅器文化が成立したのに対して、周辺の中国東北地区、朝鮮、日本では青銅器はまずシャーマニスティックな器物として流入し、その後漢文化の波及の中で権力の証へと性格を変えていったと結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近藤氏の30年に及ぶ東アジア青銅器研究を集大成したものである。膨大な考古資料の渉猟、分析に加えて、金石文、甲骨文、史書などの文字資料にも目を配った研究は圧巻であり、これだけのスケールをもって日本を含む東アジア青銅器文化の展開とその特質を総合的かつ実証的に論じた研究は希有であるといっても過言ではない。中原で登場した青銅器文化が性格を微妙に変えながら波及し、やがて周辺地域の国家形成過程において大きな役割を果たすことになるという東アジア青銅器文化の長期の展開を、資料的裏付けを示しながら叙述したことは本論文の最大の評価点であろう。

とくに、中国東北地区と朝鮮の青銅器文化を時期的、系統的に整理した点、武器と鐸をともに用いた弥生時代の農耕儀礼が東アジア農耕社会の儀礼に連なることを明らかにした点、詳細な型式学的分析に文献的解釈を加えた三角縁神獣鏡魏鏡説の主張、これらの検討に基づいて弥生時代から古墳時代の歴史展開が中国や朝鮮を発信源とする文化複合の影響下に進行したことを明確にした点などは、いずれも学史を新たに切り開く高いレベルの研究として特筆できる。

ただ、長年にわたる研究の集大成という性格上、論文を構成する各章節の執筆年にはかなりの隔たりがあるため、新たな出土資料や研究に対する扱い、用語の一貫性といった点でやや配慮を欠いたり、叙述が重複した部分が認められたことは惜しまれるところである。

もっとも、これらの点は、本論文に結実した大きな研究を前にすれば望蜀のごときものであろう。本研究科委員会は、東アジア青銅器文化の研究としてまれにみる高い水準に到達している本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。